

ハイデルベルク信仰問答講解説教21「教会の豊かさ」(2012年1月22日 礼拝説教)

【聖書箇所】

そのとき、主がイサクに現れて言われた。「エジプトへ下って行ってはならない。わたしが命じる土地に滞在しなさい。あなたがこの土地に寄留するならば、わたしはあなたと共にいてあなたを祝福し、これらの土地をすべてあなたとその子孫に与え、あなたの父アブラハムに誓ったわたしの誓いを成就する。わたしはあなたの子孫を天の星のように増やし、これらの土地をすべてあなたの子孫に与える。地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る。アブラハムがわたしの声に聞き従い、わたしの戒めや命令、掟や教えを守ったからである。」(創世記26:2-5)

わたしは、あなたがたがキリスト・イエスによって神の恵みを受けたことについて、いつもわたしの神に感謝しています。あなたがたはキリストに結ばれ、あらゆる言葉、あらゆる知識において、すべての点で豊かにされています。こうして、キリストについての証しあなたがたの間で確かなものとなったので、その結果、あなたがたは賜物に何一つ欠けるところがなく、わたしたちの主イエス・キリストの現れを待ち望んでいます。主も最後まであなたがたをしっかり支えて、わたしたちの主イエス・キリストの日に、非のうしろの者にならない者にしてください。神は真実な方です。この神によって、あなたがたは神の子、わたしたちの主イエス・キリストとの交わりに招き入れられたのです。(Iコリント1:4-9)

【説教】

今日は、第21主日、問54-56までを読みます。信仰問答は、使徒信条の第三項、聖霊の項に入り、その中の文言を一つ一つ取り上げておりますが、今日の第21主日では「聖なる公同教会」「聖徒の交わり」「罪の赦し」この三つの事柄を一気にまとめてまいります。ここでこの中心的な主題は明らかに「教会」であります。しかしこの内容は一回の説教では到底扱いきれません。例えば、説教において使徒信条の講解をすることもありますが、そこでこのように三つの文言をまとめて扱うことはいたしません。加藤常昭先生が出している『ハイデルベルク信仰問答講話』という書物がありますが、それでもここは問答を一つ一つ切り離して丁寧に扱っています。他の信仰問答に関する書物も、この三つの問答をまとめて扱うことはしていません。せいぜい「聖なる公同教会」と「聖徒の交わり」を一緒に扱うという感じです。それだけ一つ一つの事柄が大きく深い内容を持っているのです。わたくしもここで触れられている内容を全部今日の説教に込めることは不可能と考えますので、ここからほんのごく一部を語ることにしたいと思います。ご理解をお願いします。

少し余談ですが、先週横浜で会議があり、その前日に千葉の実家に寄りました。父が現役の牧師をしておりますが、父もまたハイデルベルク信仰問答の講解説教をしているのです。父はもう十数年この講解説教を続けているということですが、それはこのように一回の説教では語りきれない部分がある。だから何年も繰り返し語っているということでした。わたくしもこれまで20回この説教を重ねてきましたが、本当に毎回語り尽くせないことを歯がゆく思うことがあります。主日毎に区切ると本当に早足で通り過ぎていく感じです。そう考えると、この説教は一年ではなく、繰り返し行う必要があるかもしれません。

そのように、到底、扱いきれない内容ですが、なぜハイデルベルク信仰問答がこの三つの事柄を一回の主日にまとめてしまうのか。それもある意味理解できることです。ここでこの主題は教会ですが、「聖なる公同教会」と「聖徒の交わり」は共にキリストの体、キリストに結ばれた群れを前提としていますし、また「罪の赦し」はこの交わりがキリストによる罪の赦しに基づく交わりであるということを示しています。密接にこれらの事柄は結びついているのです。ですからその一つ一つを細かく見ることも重要ですが、少し後ろに引いて教会の全体像を大きく捉えることも重要なことです。ここでは少し全体的な視点で教会を考えてみることにします。

今日はまず問56に注目してみたいと思います。「罪の赦し」これは非常に具体的なことです。わたしたちはキリストによっ

て罪赦されました。それは十字架のあがないによって与えられた恵みですが、ただそれだけではない。それをこの信仰問答はこういう表現で言い表します。「わたしのすべての罪と、さらにわたしが生涯戦わなければならぬ罪深い性質をも、もはや覚えようとほなさらず」注目していただきたいのは「覚えようとほなさらず」という点です。ある別の翻訳では「思い出さない」と訳します。

ドイツの牧師でラウハウスという人が、このハイデルベルク信仰問答の解説を書いています。この「罪の赦し」のところでは「赦しと忘却」という題で説教をしています。ただ赦されるのではない。それを忘れてくださる。思い出さない。このことは、わたしは新しい発見でした。神さまが忘れてくださるのです。わたしの罪深い性質を。

わたしたちは神さまに赦された者です。だから赦しに生きることができる。主の祈りでも「我らに罪をおかす者を我らが赦すごとく、我らの罪をも赦し給え」と祈ります。それはこの教会の、この世にはない交わりの一つの重要な特性を表しています。それは赦しであり、これはおそらくこの世の交わりにはない、教会だけが公言するものでしょう。でも実際はどうか。わたしたちは本当に赦せるでしょうか。

「赦そうと思う。でもわたしは忘れることができない」そういう経験はないでしょうか。そうです。赦したい。けれども忘れることができない。忘れること。これが実は一番難しいのです。水に流すと言います。でも完全に水に流せるでしょうか。水に流せたと思っても、その相手の顔を見ると、その時のことを思い出す。言われた言葉、その表情を思い出しては、また怒りをよみがえらせる。そういうことがないでしょうか。

起こったことを、誰も起こらなかったことにすることはできません。ラウハウスは、説教の中で「それは人間が過去について力がないからだ」と言います。いつまでも過去に支配されるのです。過去の力に負けているのです。だから思い出しでは怒りにふるえ、いつまでも赦すことができずにいるのです。けれども神さまの赦しは忘れることなのです。それは弱さではありません。むしろその過去に打ち勝っている。過去に全く捕われない赦しなのです。このような赦しがあるでしょうか。

神さまの赦しをわたしたちはどう理解しているでしょうか。神さまの赦しをわたしたちと同じような感覚で考えたら間違いです。わたしたちは、せいぜい表面的に笑顔はつくっても、内心はまだまだ赦せない思いでいっぱいなのです。思い出しは怒りを新たにします。そのようにいつまでも根に持つのです。神さまの赦しもそうでしょうか。本心を押し殺してがまん

して赦しているふりをしているのでしょうか。そうではありません。神さまの赦しは完全な赦しなのです。それは完全に忘れておしまいになるということ。これまでの罪も、そしてこれからも罪を犯すであろう、そのわたしたちの罪深い性質をも忘れておしまいになる。ということは、神さまの御前にわたしたちは本当に新しくされるということです。かつての罪のわたしではない。そのような過去は神さまの御前に全くの空白となったのです。だから全く新しい義なるわたしとして御前に立つのです。信仰者はそういう新しさを持つのです。

それ故、信仰問答の間60に次のようにあります。「神は、わたしのいかなる功績にもよらず、ただ恵みによって、キリストの完全な償いと義と聖とをわたしに与え、わたしのものとし、あたかもわたしが何一つ罪を犯したことも罪人であったこともなく、キリストがわたしに代わって果たされた服従をすべてわたし自身が成し遂げたかのようにみなしてください」この問答をわたくしはかつて少々誇張しすぎではないかと思って読んでいました。神さまはわたしが何一つ罪を犯したことも罪人であったこともなく見なされるとは少し言い過ぎではないか。こんな都合のいいことがあるか。でもこの今日の問答にあるように、神さまがそれをお忘れなら、神さまの前にわたしたちは本当に完全に赦されるのだということがはっきりと示されたように思います。そしてこのことを信じるのが実は教会を信じるということなのであります。

問56の問答に「恵みにより、キリストの義をわたしに与えて、わたしがもはや決して裁きにあうことのないようにしてください」とあります。またこの後、問61でも「ただキリストの償いと義と聖だけが神の御前におけるわたしの義なのであり」とあります。キリストの義がわたしの義になる。これを教理の言葉で「義の転嫁」と言います。そしてこのことは、わたしたちが信仰をもって洗礼を受け、教会に連なること、それはキリストと一つになる秘義であります。その中でこそ可能とされるのであります。それは問55で「聖徒の交わり」を扱いますが、「第一に信徒は誰であれ、群れの一部として、主キリストとこの方のあらゆる富と賜物にあずかっている」このこととも関係しています。この「富と賜物」こそキリストの義に他なりません。わたしたちはこのキリストの義にあずかり御前に立つ者とされるのです。それは世の終わり、終末にまで持ち堪える永遠の義であり、聖であります。それは今日読みましたコリントの信徒への手紙にもはっきりと示されていることです。

今、このコリントの信徒への手紙を祈禱会で読んでおりますが、この教会は非常に多くの問題を抱えておりました。信仰者以前に、道徳的、倫理的な乱れがありました。集会をしてもこの世の価値観が持ち込まれ、集会が混乱し秩序が保たれない状況にありました。このことをパウロは悲しみ、何度も手紙を書きます。時には涙を流しながら、時には厳しく叱りつけ、また愛をもって言葉を綴ります。この手紙の中でパウロはそのような教会の人々に向かって「キリスト・イエスによって聖なる者とされた人々、召されて聖なる者とされた人々へ」と挨拶をします。それはもちろん彼らの中に聖なる素質があるということではありません。キリストに結ばれて、そのキリストの聖にあずかっている者ということです。キリストの義に与っているということです。そこにわたしたちの聖の根拠があります。

以前、教会につまずき、礼拝から遠ざかっている教会員の方を訪ねてお話を伺ったことがあります。その方は使徒信条の言葉の中で「聖なる公同の教会」を信ずだけがどうしても信じられない。これ以外のことは信じることができるけれども、これだけが信じられないと話しておられました。それは何か教会の交わりにおいて深い傷を負ったことを直感的に伺わせました。

地上の教会は、本当に貧しく小さい弱いものです。それは外面的なことだけではありません。内面的にもまだまだ未成熟であり、その弱さ、汚れは覆い難いものがあります。教会の中には、これが本当に教会だろうかと疑いたくなるような現実があります。そういう現実の前に愕然とし、もう教会をあきらめて

しまいたくなるような気持ちさえ起こる。むしろこの世の集まりの方がまだまともなのかもしれないと考えることさえあります。どうしてこれが聖なる教会と言えるのか。

そうです。わたしたちの中には当然、この聖である根拠はない。キリストの義と聖だけがわたしの義と聖なのです。教会の義と聖なのです。わたしたちは恵みによって、これに与っている。わたしたちは教会の何を信じているのでしょうか。皆が成人君主のように立派になるのでしょうか。誰もが憧れるような温かく、柔和で、心安らぐ交わりでしょうか。そこだけを見ていなければつまずきは避けられないでしょう。でもわたしたちはそういうことを信じているのではない。人間を信じているのではないのです。教会を信じるという時、わたしたちはキリストを信じているのです。キリストのすべての恵みに与ること。そのようにして御前に赦されて立つことができる、その救いを信じているのです。その恵みに与った群れとして、お互いが赦された者として世の終わりまで共に歩み続けることを信じるのです。そこにこの世にはない教会としての新しい交わりが形成されていくのです。

キリストの体を考える時に、わたしたちは「聖化」を忘れてはなりません。「自分は赦されているから何をしてもいい」という考えは信仰にはありません。問55「第二に、各自は自分の賜物を他の部分の益と救いとのために、自発的に喜んで用いる責任があることをわきまえなければならない」そのようにお互いが配慮し合うのです。人につまずきを与えるようなことにはなりません。そこには自ずと愛が生まれます。親切が生まれます。そして赦しが生まれるでしょう。神さまのような完全な赦しはできないにしても、相手の気持ちをくんで、理解することはできるでしょう。そのような交わりへと教会の交わりが日々高められていることを覚えましょう。お祈りをいたします。

天の父。あなたの赦しの大きさ、深さを改めて覚えます。あなたの御前ではかつての罪は数えられず、キリストのあがない、義がわたしを覆っていることを感謝します。どうかわたしたちをこのキリストの中へ解き放ってください。その聖と義をもってわたしたちを完全に捕らえてください。またそしてそれに相応しく生きるように導いてください。主の御名によって祈ります。アーメン。